山岡加奈子編『ラウル政権下のキューバ』調査研究報告書　アジア経済研究所　2010 年

第５章

同質性と多様性のはざまで
—21 世紀キューバにおける人種差別との闘い—

工藤　多香子

要約：
キューバでは、経済危機に対する諸措置がとられ社会が大きく変容した 1990 年代以降、人種差別が問題となりつつある。本稿では 21 世紀に入って高まりを見せる国内の人種差別に関する議論を概観したうえで、キューバ社会で「人種」を語るときにつきまとう困難を考察し、現在の人種差別との闘いがネイションとの関係でめざす方向性について検討する。
キーワード：
「人種」、混血ナショナリズム、キューバ

はじめに

1920 年代から 1930 年代のラテンアメリカ諸国では、人種・文化の混淆に国民のアイデンティティを求める混血ナショナリズムが次々と登場した。「混血は純血より劣る」とする優生学的な考えが浸透していたアメリカ合衆国やヨーロッパから見ると、諸人種の混血が進んだラテンアメリカは、しばしば「人種的に劣った」地域とみなされてきた。混血ナショナリズムはそれを逆手にとり、混血がすすんだラテンアメリカにおいてこそ、人種的偏見にとらわれない真に平等で民主的な社会が実現すると主張するものだった。たとえば、1925 年にメキシコのホセ・バスコンセロス(José Vasconcelos)は、ラテンアメリカでは人種混淆の結果、やがて従来の「人種」を超克した「宇宙的人種」が登場すると唱えた。またブラジルでは 1930 年代に人類学者ジルベルト・フレイレ(Gilberto Freyre)が、人種混淆がすすんだブラジル社会では異人種に対する寛容さを特徴とする「人種デモクラシー」が実現しているとした。

植民地時代にアフリカ大陸から多くの黒人奴隷が連れてこられたキューバも例外ではない。1931 年に詩人ニコラス・ギジェン(Nicolás Guillén)は「キューバの魂は混血」と表現した。また 1940 年に民俗学者フェルナンド・オルティス(Fernando Ortiz)は、多人種・多文化の融合にこそキューバ性があるとし、その形成を、時間をかけてさまざまな食材を煮込む

キューバの郷土料理アヒアコに喩えた[1]。この混血ナショナリズムは、「キューバ人とは、白人以上、ムラート以上、黒人以上」のものと主張し、人種概念を否定した独立運動の指導者ホセ・マルティの理念とも共鳴し、キューバ人の間に定着していった。

1950 年代に入ると、異人種に寛容なはずのラテンアメリカにも人種差別が存在すると指摘する研究が現れ始めた。そうすると今度は混血ナショナリズムに対する批判が噴出した。それは、「白人」を頂点におき、先住民やアフリカ系住民を最下層にとどめおく社会構造を覆い隠すレトリックにすぎず、実態は「白人」中心の社会・文化への同化を暗に強制しているというのだ(Applebaum et al. [2003: 8-9])。この批判は、ラテンアメリカ各地で「黒人」や先住民による権利回復を求める運動を後押しし、封印されていた「人種」はじょじょに可視化されてきた。1980 年代以降は、ブラジルやエクアドルのように多文化主義を公式に謳う国が登場した[2]。混血ナショナリズムが根強いベネズエラでも、1999 年の新憲法で「多民族・複数文化社会として」の国づくりが宣言され、アフロ系子孫が民族としての認知を求める運動を展開し始めている(石橋 [2009])。

一方キューバでは、革命直後の 1959 年 3 月にフィデル・カストロが、非白人を締め出す職場があると指摘し、人種差別は革命が解決すべき重要課題であることを認めた。しかし、そのわずか 3 年後の 1962 年に、革命政権は人種差別をすでに解決したと宣言する[3]。それ以来、キューバ社会では人種差別が公の場で議論されることはなくなった。1970 年代以降ラテンアメリカ各地で先住民や「黒人」たちが、自分たちの存在と権利の認知を求めて立ち上がりつつあったときも、キューバではきわめて対照的に「われわれキューバ人は、みな平等」というスローガンがくり返され続け、「人種」は見えないままだった。

ところが、革命政権成立から 50 年を経たいま、長く続いた人種問題に対する沈黙が破られようとしている。1990 年代後半から市民の間でじょじょに広まってきた人種差別に対する不満が、識者や研究者による議論へと発展し、現在、キューバ社会における人種差別との闘いは明確なかたちをとりつつあるのだ。

本稿では、近年のキューバにおける人種差別に関する議論の高まりを概観したうえで、キューバの人種差別との闘いがどのような方向性をもっているのかを、とりわけネイションとのかかわりにおいて検討する。

第 1 節　現代キューバにおける人種をめぐる議論の展開

1.　「非常時」と肌の色

社会主義圏の崩壊はキューバに深刻な経済危機をもたらした。1990 年に「非常時」を宣言した政府は、国民に外貨の所持と使用を許可し、個人営業を一部認可するなどさまざまな経済措置をとった。さらに外貨獲得の手段として、急速に観光産業の育成に力を注いだ。その結果、国内経済はなんとか回復に向かったものの、社会にはさまざまな歪みがもたらされた。とりわけ深刻な問題は、それまで比較的貧富の差が少なかった社会に生じた経済

格差である。

「非常時」以前は、必要最低限の食料と日用品は配給制度できわめて低い価格で提供されていたため、国が支払う賃金でだれもがとりたてて不自由のない生活を営むことができた。ところが、1990 年代の物不足によって配給所では欠配が増え、必要な食料は値段の高い農産物市場で入手せざるをえなくなった。食料以外の日用品にいたっては外貨ショップでしか買えない。月平均 10〜15 米ドルほどの従来の賃金だけでは窮乏した生活しか送れなくなった。より良い生活を送るためには、「非常時」以後の経済是正プロセスで登場した「新興部門」――チップなどの副収入がみこめる観光業や、給料の一部として外貨が支払われる外資との合弁企業など――に就職するか、個人営業の認可を得て増収をはかるか、あるいは国外の親戚からの外貨送金にたよるしかない。しかし、このような収入の代替形態へアクセスする機会は、すべての国民に対等に与えられているわけではない。よりよい職に就くための、そしてできるだけ多くの収入を得るための競争が生まれ、より恵まれた条件と機会をもつ人に対する羨望が人々の心に宿った。かつてあった「公平な社会」――少なくとも国民がもっていたその認識――は急速に過去のものとなった。

さらに、少なからぬ人々が経済格差にはある「ルール」があてはまることに気づいた。それは、持てる者と持たざる者では肌の色が違うという「ルール」である。実際、チップなどが期待できるホテルやレストランで働く従業員の中に「黒人」をみつけることは難しい。優れた経歴と才能にもかかわらず「新興部門」に採用されないのは、その人の肌の色が理由だと感じている人は少なくない(De la Fuente [1998: 6-7])。人類学研究所が 1990 年代末に行った調査によれば、「新興部門」の幹部職のうち「白人」は全体の 75.4%であるのに対し、「黒人」は 5.1%、「ムラート」は 19.5%にとどまっている[4]。さらに技術職・管理職にいたっては「白人」が 79.3%を占めるのに対し、「黒人」は 6.1%、「ムラート」は 14.6%でしかない[5]。全人口のうち「白人」65%、「黒人」10.1%、「ムラート」24.9%という 2002 年センサスの人口統計結果と比較すれば、高収入を見込める「新興部門」では「白人」の占める割合がかなり高いことがわかる[6]。

また、同研究所が 1996 年から 2002 年にかけてハバナ市、サンティアゴデクーバ市、サンタクララ市で行った聞き取り調査の結果では、「白人」は国外からの海外送金を「黒人」よりも 2.5 倍多く、「混血」よりも 2.2 倍多く受け取っている(Espina Prieto, et al. [2006: 47-48])[7]。

生活のために闇の商売を始める人も増えた。警官は街で不審な人物を見つけると身分証の提示を求めるが、誰に尋問するかの判断にも肌の色は影響している。「犯罪者の多くは黒人」という古くからのステレオタイプが復活しているのだ。

こうした経済格差に刻印された人種差別にいち早く反応したのは、若いラップ・ミュージシャンたちだった。彼らは「非常時」以降の社会にくすぶる不満を代弁し、黒い肌のために日常的に出会う偏見や差別を告発した。キューバ社会が大きく変容していった 1980

年代後半以降に生まれ育った若者の多くが彼らのメッセージに共感し、ラップは 1990 年代に一つの文化運動となる。1995 年からほぼ毎年開催されるフェスティバル「ハバナ・ヒップホップ（Habana Hip Hop）」や 2003 年に創刊したヒップホップ雑誌『モビミエント（Movimiento）』は、彼らの音楽を伝えるとともに人種差別を討論する場を開く役目を果たした[8]。

同じころ、若い美術作家たちも人種偏見を問題とする作品を発表し始めた。1997 年に開催された二つの展覧会「ケロイド I (Queloide I)」と「ミュージシャンでもスポーツ選手でもなく（Ni músicos ni deportistas）」は、いずれも黒い肌への偏見を主題とした。前者は「経済的に不利な立場やトラウマ、そして自己否定と向き合う、周縁化された個人としての黒人」に焦点を当て、後者はタイトルから明らかなように「黒人」に対するステレオタイプを批判する展覧会だった(Esquivel [2005: 17-19])。1999 年には再び「ケロイド II (Queloide II)」が開催され、やはり美術作品を通して黒い肌に対する偏見を告発した[9]。

一方、国内のアカデミズムは、1990 年代を通して「人種」を論じることにまだ慎重だった。先陣を切って人種問題を世に問うたのは評論誌『テマス *Temas*』だった。同誌は 1996 年に「民族と人種について」という特集を組み、人類学研究所や心理学・社会学研究所で始まりつつあった、人種偏見をめぐる調査結果の一部をいくつかの論文として発表した。これらの論文は、「人種差別を解決した」はずの革命後の社会に、いまだ「黒人」に対する負のステレオタイプが家庭や日常生活の中で再生産され続けていることを学術的に論じている点で、1962 年以来の沈黙を破る画期的なものであった[10]。肌の色に対する偏見が顕在化するきっかけとなったのは「非常時」の経済危機とその後広がる格差であったとはいえ、「黒人」に対する社会的偏見は経済格差を解消しさえすれば解決するような単純な問題ではないことがもはや社会科学的に明らかとなった。

2. 活発化する議論

人種差別に対する市民からの不満と批判を受け、1998 年に開催されたキューバ作家・芸術家協会(UNEAC)第 6 回総会では人種問題が議論された。大会に出席したフィデル・カストロは「人種主義に関する問題は、十分に深く分析しなくてはならない」と発言した(Lazo Hernández [2008])。1962 年以来はじめて、政権がキューバ社会に人種差別があることを認め、その解決に取り組む方針をとることが明確になった。この大会を境に、アカデミズムの世界における人種の議論は加速した。1999 年にはハバナ大学で人種関連の討議会やワークショップが開催され、UNEAC 内には人種問題を検討するプロジェクト「キューバの色（Color Cubano）」が設置された[11]。UNEAC 発行の文芸誌『ラ・ガセタ・デ・クーバ（*La Gaceta de Cuba*）』、フェルナンド・オルティス研究所の機関誌『カタウロ（*Catauro*）』、電子ジャーナル『ラ・ヒリビーリャ（*La Jiribilla*）』、キング牧師記念センター機関誌『カミーノス（*Caminos*）』といった雑誌が、特集を組むなど人種に関する論考を積極的に掲載し、

議論の活性化に大きく貢献している。

21 世紀に入ると、人種問題を論じる識者の数は急速に増えた。その中でも、2002 年以来さまざまな雑誌に人種問題に関する論文を寄稿してきたハバナ大学教授エステバン・モラレス・ドミンゲス（Esteban Morales Domínguez）は、2007 年に『キューバにおける人種問題への挑戦』を出版した。同時代の人種問題を論じる本が国内で出版されるのもまた、1962 年以来はじめてのことだ。「黒人」の著者が社会科学者として冷静に問題を分析したこの本の出版によって、モラレスはキューバの人種問題の第一人者となり、現在この議論を推進する大きな役割を担っている。

第２節　人種問題を論じることの困難

国内の人種差別批判の議論を牽引しているのは多くが「黒人」や「ムラート」の知識人である。だが、議論は必ずしも彼らだけに閉じられているのではない。21 世紀に入ったいま、人種問題は社会科学・人文科学の分野に属するキューバの多くの知識人が関心を寄せるテーマとなりつつある。少なくともハバナ市では「人種」をテーマとするシンポジウムやワークショップが頻繁に開かれるようになり、誰もが自由に参加できる。確実に学術的レベルでの人種問題の検討は定着している。その一方で、議論がアカデミズムの世界と一部の若い芸術家にとどまっているのもまた事実である。人種問題をテーマとする論文の数は増えたが、それらを掲載するのは読者が限定される評論誌や学術誌がほとんどだ。一般総合誌や新聞、テレビなどのマス・メディアでは、人種問題がとりあげられることはきわめて少ない。というのも、人種問題の議論をより広い世界に押し進めるにはいまだ大きな壁が立ちはだかっているからだ。人種差別の存在を否定したり、人種問題に関しては口をつぐむ人々が、肌の色にかかわらずまだ少なくないのだ(Morales Domínguez [2007: 308], Morales Domínguez [2006])。

人種差別を問題として認識しようとしないのは、国家の指導者たちではない。先述した 1998 年の UNEAC 総会での発言以降も、フィデル・カストロは 2003 年の教育者会議、2004 年の第 8 回青年共産同盟大会でくり返し人種問題に言及している。また、2008 年に開催された UNEAC 第 7 回総会の中心報告には、人種差別が現代社会に存続していることが明記された。2009 年の人民権全国議会第 4 期定例会議でも現在の最高指導者ラウル・カストロが、「人種」や性の差別と偏見はまだ続いていると認めている(Castro Ruz [2009])。政府指導者層は、すでに従来の沈黙を破り、むしろ差別の存在を認知し、問題として検討する方向へと転換しているのである。それにもかかわらず、「不安や戸惑いから、人種問題について沈黙したり、妨害しようとする」態度がとりわけ官僚の間に色濃くみられ、また人種差別を解決すべき問題と理解しない知識人もいるという(Rodríguez Ruiz [2008: 88], Morales Domínguez [2007: 318])。

先述のハバナ大学教授モラレスは彼の著書の中で、人種差別に対する無関心や「人種」

を話題にすることへの警戒が国民に浸透したのは、革命当初の政策によるものだと批判する[12]。先に述べた通り、1959 年 3 月にフィデル・カストロが人種差別に言及したものの、政府は人種分離制度を撤廃した以外、人種差別の解決を目的とする特別な措置をとることはなかった。教育・医療の無料化、公共料金の引下げ、所得格差の是正など、革命直後に実施された大規模な社会改革は、貧困層の生活を大きく改善した。貧困層には相対的に多くの「黒人」や「ムラート」が含まれていたため、結果として、これらの諸改革は「人種」間の社会的・経済的格差を縮小することにたしかに貢献した[13]。しかし、それらは人種差別をなくすことそのものを目指したというよりも、国民全員に平等に向けられた政策だった。そして先述のとおり、1962 年以降、政権は人種問題に関して沈黙してしまう。ただし、この沈黙にはイデオロギー的抑圧が伴っていた。人種差別がなくなった以上、人種を語ることは意味がないとされたばかりか、それは革命防衛のために一丸となるべき国民を「人種」で分類し、国民統合にひびを入れようとする「反革命的行為」とみなされるようになった(Morales Domínguez [2007: 202])。「人種」を語ることに対する政治的な抑制を伴った社会的圧力は、国家の指導者が沈黙を破った今もなお、キューバ社会に満ちているのである。モラレスは、このような状況を生みだした原因は、平等主義に基づき公正な社会を築けばおのずと人種問題は解決すると考えた政権の理想主義にあると批判する。そして、革命防衛という優先課題があったとはいえ、人種問題を「タブー」とするのではなく、早くから具体的な人種差別対策をとり、人々が問題と向き合い解決に取り組むような意識と文化を育むべきだったと批判する(Morales Domínguez [2007: 189, 191])[14]。彼は、真の国民統合に到るためには人種問題を避けては通れないと強調し、人種差別と人種間の経済格差が顕在化したいま、沈黙を続けることは、体制に対する不満を生み、逆に反体制の側に利用されると懸念する(Morales Domínguez [2006])[15]。

モラレスが指摘するとおり、「みな平等」という革命政権のイデオロギーは「人種」を忌避する状況を作り出していた。だが、キューバ社会に満ちる人種問題の語りにくさの原因はそれだけではない。革命政権成立の約 30 年前、「黒人」ジャーナリストであるグスタボ・ウルティア(Gustavo Urrutia)が当時の有力紙『ディアリオ・デ・ラ・マリーナ(*Diario de la Marina*)』で「ある人種の理想」というコラムを担当していた。彼はこのコラムを通じて「黒人」が人種差別に苦しんでいることに、なんとか世間の関心を向けようと試みた。ウルティアのきわめて慎重なアプローチが功を奏し、彼のコラムは評判を得たものの、紙上で「人種」を語ることには批判もあった。マルティネスを名乗るある読者は、ウルティア宛てに送った手紙で「黒人の問題はそれを語るときにのみ存在する」と批判している(Martínez [1929])。「人種」を語ることの困難は、混血ナショナリズムを志向するキューバ社会で、キューバ革命よりはるか以前から連綿と続いているのである。

2010 年 1 月 21 日、キューバ国営テレビで放映された政治討論番組「円卓(Mesa Redonda)」では「人種主義に対するキューバの闘い」がテーマとなった。モラレスや人類学者パブロ・

ロドリゲス・ルイス(Pablo Rodríguez Ruiz)など複数の識者が出演し、キューバ国内に現在も存在する人種差別について討論が行われた。これまでアカデミズムの世界にとどまっていた議論がテレビ番組にとりあげられたことは、人種問題に大衆の関心を喚起するためには大きな前進だったといえよう。しかし、「人種」の語りづらさが、政権のイデオロギーだけでなく、独立以降、国民に定着したナショナリズムにも支えられている以上、この壁をのり越えるのはそう簡単ではない。「人種」を語ることは、いま一度キューバというネイションを問い直すことにつながるからだ。

第３節　「人種」とネイション

すでに述べたように、ラテンアメリカにおける混血ナショナリズムは、「人種」や民族の差異を融解することで、差別の構造を見えなくしてしまったとして批判された。混血ナショナリズムの名のもとに隠れた白人優位主義を暴き、「人種」を可視化するために、反人種差別運動の多くは「混血」に溶け込むのを拒み、「人種」や「民族」としての社会的認知と権利の回復とを求めてきた。そしてその成果は、たいてい国家による多文化主義政策の採用として表れる。

キューバの場合は、混血ナショナリズムに加えて、革命直後から強調された革命防衛のための国民統合イデオロギーが働き、人種差別を認識することが極めて困難な社会となった。革命政権初期の政策に対する批判と、その修正を求める声がすでにあがっているのは前節でみたとおりである。では、キューバの人種問題を議論する人々は、他のラテンアメリカ諸国の反人種差別運動がそうであったように、混血ナショナリズムに対しても、その見直しを要求しているのだろうか。

現在キューバで起こりつつある人種問題をめぐる議論の全体を運動と呼べるのならば、この運動は中心となる人物や組織をもたず、多元的な議論として展開している。そのため決して一つの考え方にこの運動全体を代表させることはできない。しかし、運動の方向性をある程度見定めることはできるだろう。以下は、主にモラレスの著作を中心に「人種」とネイションとの関係について考察してみたい。

他のラテンアメリカ諸国と同じく、キューバでも「混血文化」の名のもとに「白色化」が進められてきたという認識は、モラレスの著作にも随所に表れている(Morales Domínguez [2006])。彼にしてみれば、いまのキューバ史は「黒人」の活躍にほとんど言及しない「白人」主流の歴史であり、アフリカ文化を教えず、ヨーロッパに偏向している教育は、「白人」になるための教育にすぎない(Morales Domínguez [2007:21])。そして、「黒人と混血は人種問題について沈黙が続くことを許してはいけない。沈黙することは白人ヘゲモニーの表明でしかない」と、自分たちのおかれた状況がすでに人種間の不均衡なバランスの上に成り立っていることへの自覚をうながす(Morales Domínguez [2006])。さらに、この白人ヘゲモニーの中で人種差別と闘うためには、「黒人」も「混血」も人種意識を持つべ

きであり、そしてキューバ社会は多様性を尊重すべきだと主張する(Morales Domínguez [2007: 299, 304])。また、奴隷制時代から歴史的に引き継がれてきた人種間の社会的・文化的格差は今なお存在するとし、平等社会を目指すには、このスタートラインの遅れを埋め合わせるなんらかの差別是正措置を考慮すべきだと論じている(Morales Domínguez [2007: 248-264])[16]。

ここにあげたモラレスの主張は、彼一人の孤立した意見ではない。とりわけ人種意識の必要性には共感する人が少なくない。彼が著書で引用しているように、心理学者カロリーナ・デ・ラ・トーレ(Carolina de la Torre)は自著『アイデンティティーズ――心理学からの一考察(Las Identidades: Una mirada desde la sicología)』の中で、「黒人」や「混血」が自分のアイデンティティを自覚しなければ、外部によってステレオタイプが作られ、ひいては人種差別の存続に寄与してしまうと、心理学的観点から人種意識の必要を説明している(Morales Domínguez [2007: 298-299])。また、人種意識の表明は街の中でもすでに見てとれる。最近ではアフロキューバ宗教に用いる装身具をあえて身につけたり、ドレッドヘアにするなど、装いを通して「黒人」としての自己を表明する若者は少なくない。また、キューバのラスタファリに関する最近の研究では、ジャマイカ発祥のこの精神的・文化的活動に近づく若者の多くが、日常経験する人種差別に対する不満から人種的自尊心を求めていることが論じられている(Furé Davis [2006: 40])。ヒップホップを愛好する若者にも同じことがいえる。ラップのコンサートに行けば、「俺／私は黒人だ」と歌うのをくり返し耳にする。人種意識をもち、それを自由に表明したいと望む人々はすでに増えつつある。

キューバ史で「黒人」が正当に取り上げられていないという点については、ホセ・マルティ国立図書館の歴史学者トマス・フェルナンデス・ロバイナ(Tomás Fernández Robaina)が早くから指摘している。彼は1990年に、黒人社会運動の歴史を扱った『キューバの黒人(*El negro en Cuba 1902-1958*)』を著し、現在の反人種差別運動の先駆的中心人物の一人である。黒人社会史を扱う彼の大学院の講義には、2002年頃から人種意識に目覚めたラップ・ミュージシャンや若い芸術家たちが聴講に来るようになった[17]。また、ホセ・マルティ国立図書館内に設立された「キューバの人種性検討委員会(Comisión Nacional para la Reflexión sobre la Racialidad en Cuba)」は、アフリカの文化や歴史をいかに教育に取り入れるかの検討を始めている[18]。モラレスの主張は、彼自身の差別との闘い方の表明であると同時に、現在のキューバで多元的に展開する人種差別との闘いのあり方を要約しているともいえる。

「混血」という名の「白色化」を批判し、人種意識の必要性と差別是正措置の検討を訴えるモラレス、そして彼の考えに共鳴する人々は、混血ナショナリズムを拒否して、多文化主義への道を歩みだそうとしているかに見える。たしかにモラレスは人種差別といかに闘うかを論じるとき、多様性の尊重を求めているのだ。

ところがネイションを論じるとき、彼は一転してむしろ同質性を強調する。キューバ人とは、肌の色はさまざまであっても、みな同じ言語、同じ文化、同じ心理を共有する、多

人種――もしくは多色――の単一民族だと彼は言うのだ。そして、国内にマイノリティは存在せず、キューバは多民族社会ではないと言いきる(Morales Domínguez [2007: 88, 92, 107-108])。

一方では多様性の尊重を求めつつ、他方ネイションに言及するときにはその同質性を強調する、この一見矛盾した論調は、先述のフェルナンデスにもみられる。ときに「白人」ととられるほどに明るい肌をもつものの、自らを「黒人」あるいはアフロ系子孫と名乗る彼は、キューバ人を「多文化性のある単一民族」と表現する[19]。彼はモラレスと異なり、文化的多様性とマイノリティの存在を認めるが、しかしやはりキューバ人を「単一民族」と表現している点ではモラレスと同じである。要するに彼らは、異質なもの同士が融合して同質化することをめざす混血ナショナリズムそのものを否定しているわけでも、それに加わることを拒否しているわけでもないのだ。それでは彼らがいう多様性とは何なのか。

モラレスはオルティスの例のアヒアコの比喩をひきながら次のようにいう。

> 「現実には、『アヒアコ』は完成していない。火力を弱めようとする人々を近くから見張りながら、まだ火にかけ続けなくてはならない。いくつかの芋類や肉――それは想像していた以上に多くあるのだが――が煮込まれるように、力をこめてたえずかき混ぜながら。」(Morales Domínguez [2007: 321])

モラレスが多人種と表現し、フェルナンデスが多文化性と呼ぶのは、一つの鍋の中でまだ煮込まれずに原形をとどめている食材のようなものなのだ。同じ鍋に入れられた以上、それらの食材はキューバ人という一つの料理となる運命を共有する。彼らは混血ナショナリズムを未来に向けたプロジェクトとしてとらえているのだ。現在はまだ多様性を残したプロセスにすぎない。それは、未来の同質化を運命づけられた多様性である。そして彼らが多様性を強調するのは、混血のプロセスが一つに偏ることなく、多様な「食材」が対等に融合すべきことを表現するためである。

モラレスは著書の中で人種意識の必要性を訴えながらも、同時に「人種」は社会的構築物にすぎないともくり返している。ただし、社会的構築物だからといって消去しえるものではなく、現実に「人種」が差別を生み出している状況でその差別と闘い、社会に公正な居場所を得るためには、「戦略的人種」が必要なのだという(Morales Domínguez [2007:299])。それは、「白色化」することなく対等に混血していくプロセスを見守るために必要なのだ。そしてそれはまた、キューバ民族完成のとき、つまり「人種」がもはや必要とされなくなるときまでの、「時限的人種」として想定されている。

おわりに

モラレスやフェルナンデスの議論は、すでにラテンアメリカ諸国で批判にさらされてき

た混血ナショナリズムの枠組を解体するものではない。また、多様性を強調している点では、多文化主義が台頭する以前のアメリカ合衆国におけるメルティング・ポットの議論を連想させるだろう。はたして彼らは時代錯誤的な議論を繰り返しているだけなのだろうか。モラレスらの考えが人種差別の処方箋となる一つの希望としては、混血ナショナリズムが「差別される側」からの修正案として提示されている点である。古い枠組にしたがいながらも、「白色化」に陥らない混血ナショナリズムという新たな可能性を提案し、人種差別と闘おうとしているのだ。

アメリカ合衆国などの多文化主義先進諸国では、すでに多文化主義の限界やその効力への疑義が指摘されて久しい。アイデンティティ・ポリティクスの実践によって膠着した「人種」やエスニシティのカテゴリーにつきまとわれることに、居心地の悪さを感じる若者が増えている。そして彼らの間から、「ポスト人種(レイス)」「ポスト・アイデンティティ」を志向する声があがりつつあるという(竹沢 [2009])。いまキューバでかたちとなり始めた、混血ナショナリズムを否定し去らないままでの反人種差別闘争は、ポスト多文化主義の社会にもなんらかの示唆を与えるかもしれない。

もちろん、この闘いをただ楽観的にだけ見ることはできない。彼らの理想に近づくためには、まず、人種差別について論じることを困難にしている従来の混血ナショナリズムの魔力を一度解き放たなければならない。モラレスがどんなに「戦術的」であることを主張したところで、そこで必要とされる「人種」が、本質主義的に実体化していく可能性は否定できない。

キューバの反人種差別との闘いはまだ緒に就いたばかりだ。現時点でこの運動になんらかの評価を下すのはもちろん時期尚早である。ただ、多様性か同質性かの単純な二項対立の枠組では彼らの運動をとらえきれないことだけは確かだろう。

【参考文献】

石橋純 [2009]「『黒人』から『アフロ系子孫』へ――チャベス政権下ベネズエラにおける民族創生と表象戦略」(竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店 244-265 ページ)

工藤多香子 [1997]「言説から立ち現れる『アフロキューバ』――フェルナンド・オルティスの文化論をめぐる考察」(『アジア・アフリカ言語文化研究』54 号　55-76 ページ)

―― [2002]「白人でもなく、黒人でもなく――キューバ国民像と『人種』」(坂上貴之他編『ユートピアの期限』慶應義塾大学出版会　219-244 ページ)

―― [2006]「社会主義国キューバで発せられる『黒人』の声――ラップ、人種差別、そして革命」(羽田功編『民族の表象――歴史・メディア・国家』慶應義塾大学出版会　191-236 ページ)

鈴木茂 [1999]「語り始めた『人種』――ラテンアメリカ社会と人種概念」(清水透編『＜南＞から見た世界 5 ラテンアメリカ』大月書店　39-66 ページ)

―― [2009]「多人種・多文化社会における市民権――ブラジルの黒人運動とアファーマティヴ・アクションをめぐって」(立石博高・篠原琢編『国民国家と市民――包摂と排除の諸相』　山川出版社　273-298 ページ)

竹沢泰子 [2009]「ポスト多文化主義における人種とアイデンティティ――アジア系アメリカ人アーティストたちの新しい模索」(竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店　266-290 ページ)

Applebaum, Nancy P., Anne S. Macpherson and Karin Alejandra Rosemblatt [2003] "Introduction: Racial Nations," in Nancy P. Applebaum et al. (eds.), *Race & Nation in Modern Latin America*, Chapel Hill & London: The University of North Carolina Press.

Blue, Sarah A. [2007] "The Erosion of Racial Equality in the Context of Cuba's Dual Economy," *Latin American Politics and Society*, vol.49, no.3, pp.35-67.

Castro Ruz, Raúl [2009] "Es preciso caminar hacia el futuro, con paso firme y seguro, porque sencillamente no tenemos derecho a equivocarnos, " *Diario Granma*, 21 de diciembre, 2009. (http://www.granma.cubaweb.cu/2009/12/21/nacional/artic01.html. 2009 年 12 月 21 日アクセス)

De la Fuente, Alejandro [1998] "Recreating Racism: Race and Discrimination in Cuba's 'Special Period'," *Cuba Briefing Paper*, No.18.

―― [2001] *A Nation for All: Race, Inequality, and Politics in Twentieth-Century Cuba*, Chapel Hill & London: The University of North Carolina Press.

―― [2008] "The New Afro-Cuban Cultural Movement and the Debate on Race in Contemporary Cuba," *Journal of Latin American Studies*, vol.40, pp.697-720.

Espina Prieto, Rodrigo y Pablo Rodríguez Ruiz [2006] "Raza y desigualdad en la Cuba actual," *Temas*, no.45, enero-marzo, pp.44-54.

Esquivel, Alexis [2005] "Queloide, la cicatriz dormida (Keloid, the Dormant Scar)," in Judith Bettleheim (ed.), *Afrocuba: Works on Paper 1968-2003*, San Francisco: San Francisco State University Gallery, pp.17-21.

Fernandes, Sujatha [2006] *Cuba Represent!* Durham & London: Duke University Press.

Furé Davis, Samuel [2006] "Rastafari: una tendencia (sub-) cultural alternativa," Tesis doctoral, Universidad de La Habana.

Lazo Hernández, Esteban [2008] "En política y en ideología tiene tanto valor hablar como escuchar," *Diario Granma*, 6 de abril, 2008. (http://www.granma.cubaweb.cu/2008/04/06/nacional/artic05.html 2009 年 8 月 3 日アクセス)

Martínez, M. [1929] “Ideales de una raza: Cómo nos ven,” *Diario de la Marina*, 19 de mayo, 1929.

McGarrity, Gayle L. and Osvaldo Cárdenas [1995] “Cuba,” in Minority Rights Group (ed.) *No Longer Invisible*. London: Minority Rights Publications, pp.77-107.

Morales Domínguez, Esteban [2006] “Cuba: algunos desafíos del color,” *La Jiribilla: Revista digital de cultura cubana*, no.279, Año V, 9-15 de septiembre. (http://www.lajiribilla.co.cu/2006/n279_09/279_06.html　2009 年 7 月 10 日アクセス)

—— [2007] *Desafíos de la problemática racial en Cuba*. La Habana: Fundación Fernando Ortiz.

Morejón, Nancy et al. [2009] “Mensaje desde Cuba a los intelectuales y artistas afronorteamericanos,” *Diario Granma*, 9 de diciembre, 2009. (http://www.granma.cubaweb.cu/2009/12/09/nacional/artic02.html 2009 年 12 月 10 日アクセス)

Pérez Sarduy, Pedro and Jean Stubbs [2000] “Introduction: Race and the Politics of Memory in Contemporary Black Cuban Consciousness,” in Pedro Pérez Sarduy and Jean Stubbs (eds.), *Afro-Cuban Voices: On Race and Identity in Contemporary Cuba.* Gainesville: University Press of Florida, pp.1-38.

Powell, Colin L. [2004] “Report to the President,” Commission for Assistance to a Free Cuba. (http://www.cafc.gov/documents/organization/67970.pdf　2010 年 2 月 26 日アクセス)

Rodríguez Ruiz, Pablo [2008] “Espacios y contextos del debate racial actual en Cuba,” *Temas*, no. 53, enero-marzo, pp.86-96.

Sawyer, Mark Q. [2006] *Racial Politics in Post-Revolutionary Cuba*, New York: Cambridge University Press.

Tamayo, Juan O. [2009] “Líderes negros condenan el racismo en Cuba,” El Nuevo Herald, 1 de diciembre, 2009. (http;//www.elnuevoherald.com/369/v-print/story/599254.html, 2009 年 12 月 9 日アクセス)

---

[1] オルティスの混血文化論については、拙稿 [1997]を参照ありたい。

[2] ブラジルの混血ナショナリズムと多文化主義の台頭については、鈴木 [1999]および鈴木 [2009]に詳しい。

[3] ブラジルの混血ナショナリズムと多文化主義の台頭については、鈴木 [1999]および鈴木 [2009]に詳しい。

[4] キューバでは「人種」の分類の一つとして「ムラート(mulato)」を使うのが一般的だが、学術書などでは「混血(mestizo)」が使われる場合もある。どちらも意味に差はなく、互換的に使われている。本稿では人種分類の用語としては「ムラート」を用いるが、参照した文献が「混血」を使用する場合は、それを尊重することとする。

[5] 詳細は Morales Domínguez [2007: 187-188]を参照。モラレスは人類学研究所の 1999 年の研究成果に依拠している。ちなみに、「非新興部門」の幹部職では「白人」57.4%、「黒人」23.6%、「ムラート」18.9%、同部門の技術職・管理職では「白人」39.1%、「黒人」27.1%、

「ムラート」33.8%となっている(Ibid.)。

[6] 後述する人類学研究所が 1996 - 2002 年に行った調査結果では、観光部門の管理職・専門職・技術職にしめる「黒人」、「ムラート」の比率はそれぞれほぼ 5%にとどまっている(Espina Prieto et al. [2006: 48])。2000 年のハバナ市統計による人種別所得格差については Blue [2007]も参照ありたい。

[7] 海外送金を受け取る「黒人」が少ない理由の一つとして、国外に亡命・移住したキューバ人のうち「黒人」・「混血」の割合がかなり少ないことが指摘できる。特にアメリカ合衆国に住むキューバ人のうち、「白人」が 85%であるのに対し、「黒人」は 5%、「混血」は 10%に過ぎない(Morales Domínguez [2007: 212])。海外送金の人種間格差については他に Blue [2007]が統計データを用いて論証している。また、統計的論証はないものの McGarrity et al. [1995]、De la Fuente [1998]、Pérez Sarduy et al. [2000]は同様の指摘をしている。

[8] ラップ・ミュージシャンの人種差別批判については Fernandes [2006]、De la Fuente [2008]及び拙稿 [2006]を参照。

[9] 1990 年代の美術界における人種偏見批判については Fernandes [2006]、De la Fuente [2008]に詳しい。

[10] 1986 年の第三回キューバ共産党大会では国の指導層に「黒人」、女性、青年が適正な比率で代表されていないことが問題視された。このときはキューバ社会における人種差別や偏見そのものが論じられたわけではないが、これをきっかけに学術的調査が開始したと考えられる。人類学研究所における人種をめぐる問題に関する研究の経緯については Espina Prieto et al. [2006: 54]の註 6 を参照ありたい。

[11] 「キューバの色」は 2009 年に解散し、同年同じ UNEAC 内に「人種主義と差別に闘う委員会 Comisión de la lucha contra el racismo y la discriminación」が設置された。

[12] モラレスは著書のさまざまな箇所で革命後の人種問題に対する対応をくり返し批判している。たとえば Morales Domínguez [2007: 189, 191, 202, 205, 215]などを参照。

[13] 革命後の社会政策全般が「人種」に与えた影響については De la Fuente [2001: 259-316]に詳しい。

[14] 革命当初の政策の失敗については、すでにフィデル・カストロが 1998 年の UNEAC 第 6 回総会で次のように認めている。「全員に機会を与えれば、差別はなくなるようにみえた。しかし、問題はよりはるかに深刻だ。われわれは特権階級、搾取階級、富裕階級がいなくなれば、人種差別も消えるだろうと思っていたのだ」(Lazo Hernández [2008])。

[15] 人種問題が反体制派に政治的に利用される例としてモラレスは、アメリカ合衆国で自由キューバ支援委員会が 2004 年に大統領あてに提出した報告書を挙げている(Morales Domínguez [2006])。この報告書は「人種や他の差別はカストロ政権のキューバで深刻な問題である」と指摘している(Powell [2004: 168])。また、2009 年 12 月 1 日、プリンストン大学教授コーネル・ウェスト(Cornel West)をはじめ 60 名のアフリカ系アメリカ人知識人が署名した「キューバの市民権のための闘いを支援するアフリカ系アメリカ人の宣言」が公表された。この宣言は「市民権を擁護する黒人キューバ市民に対する不必要かつ残酷なハラスメント」を終わらせるようラウル・カストロに求めている(Tamayo [2009])。これに対し黒人女性作家ナンシー・モレホン(Nancy Morejón)やモラレスなど 9 名のキューバ人知識人が連名で「アフリカ系アメリカ人知識人と芸術家へのキューバからのメッセージ」を公表し、アフリカ系アメリカ人コミュニティは反キューバ活動に利用されていると反論した(Morejón et al. [2009])。

[16] ただしモラレスはクォータ制には反対している。モラレスとのインタヴュー(2009 年 11 月 16 日)より。

[17] フェルナンデス・ロバイナとのインタヴュー(2009 年 11 月 16 日)より。

[18] フェルナンデス・ロバイナとのインタヴュー(2009 年 11 月 16 日)より。
[19] フェルナンデス・ロバイナとのインタヴュー(2009 年 11 月 17 日)より。